

【第14回年次大会 研究発表 要旨】

女ことばと翻訳：
理想の女らしさへの文化内翻訳

古川 弘子

日本語で書かれた文学作品では、女ことばによって女性登場人物の女性性が強調されている。この傾向は、文学のみならず他のメディア（テレビ番組、雑誌やマンガなど）でも同様に見られ、言文一致運動が起こった19世紀後半から続いてきた（因, 2007, 2010; Inoue, 2003, 2004; 水本, 2005, 2010; 上野, 2003; Levy, 2006; 中村, 2007a, 2007b）。

外国語から日本語への翻訳を考えてみると、日本語の女性文末詞は翻訳テキストでも過剰に使われ、女性登場人物の女性性が強調されている。これは翻訳者の持つ言語規範が翻訳に影響を与えているからだと考えられる。英文 ‘I will run.’ からはその話し手がどれだけ女らしいか、または男らしいかを特定することはできない。しかし日本語では、翻訳者の文末詞使用によって「走るわ」「走るの」「走る」「走るよ」「走るぜ」と、話し手の印象が女らしさや男らしさの細かいレベルまで決められる。中村（2010：23）は、現在最も典型的な女ことばが見られるのは翻訳テキストであると指摘するが、女ことばの多用によって女性登場人物の女性性が強調されるために、翻訳された作品と原書との印象に大きな差を生み出すことが考えられる。また、文学作品で多用される女ことばは、社会におけるジェンダー・イデオロギー—社会で女性や男性がこうあるべきとみなされている信念や知識—と深く関わっているといえる（中村, 2007b 他）。

筆者はこれまで、日本語で書かれたり日本語に訳されたりした文学作品の中で女性性がいかに強調されているかを分析し、イデオロギーとしての女ことばと翻訳との関わりについて知るために、1990年代に出版されたテキストを中心に定性的・定量的研究手法の組合せによる文末詞研究を行ってきた。ここではオカモトとサトウ（1992）の言語学研究を翻訳研究に応用し、新しいアプローチによる研究を行った。本稿では、これまで分析してこなかった2000年以降に翻訳されたテキストにおける女性登場人物の文末詞使用を同様の研究手法で分析し、以下5点について考察した。

- (1) 現代の日本人女性と翻訳テキストにおける女性登場人物の文末詞使用の比較
- (2) 女性主人公とその他の女性登場人物との文末詞使用の比較
- (3) 女性主人公の成長と文末詞使用の考察
- (4) 1990年代と2000年代の翻訳テキストにおける文末詞使用の比較
- (5) 翻訳テキストと映画字幕との文末詞使用の比較

さらに、女ことばとイデオロギーとの関連性を論理的に示し、この女らしさを強調する傾向、本稿で定義する「文化内翻訳」が、日本社会でジェンダー・イデオロギー強化のために重要な役割を果たしてきたということを議論した。

[参考文献]

Inoue, M. (2003). Speech without a Speaking Body: ‘Japanese Women’s Language’ in Translation. *Language & Communication*, 23: 315-330.

- (2004). Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of ‘Japanese Women’s Language’. In S. Okamoto and J. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*. (pp. 57-75). New York: Oxford University Press.
- Levy, I. (2006). *Sirens of the Western Shore: The Westernesque Femme Fatale, Translation, and Vernacular Style in Modern Japanese Literature*. New York: Columbia University Press.
- Okamoto, S. and S. Sato. (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference, April 4 and 5, 1992, Vol.1*. (pp. 478-488). Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.
- 上野千鶴子(2003)『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社
- 因京子(2007)「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い—女性ジェンダー標示形式を中心に—」『日本語とジェンダー』第7号
https://gender.jp/journal/backnumber/no7_contents/chinami/ (2013年2月22日)
- (2010)「マンガ—ジェンダー表現の多様な意味」中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』(pp. 73-88) 世界思想社
- 中村桃子(2007a)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
- (2007b)『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』NHK 出版
- (2010)『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- 水本光美(2005)「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』第5号
https://gender.jp/journal/backnumber/no5_contents/mizumoto/ (2013年2月22日)
- (2010)「テレビドラマ—“ドラマ語”としての「女ことば」」中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』(pp. 89-106) 世界思想社

(ふるかわ ひろこ・東北学院大学講師)